

特集：リサーチ・ナビ調べものに役立つWebサービス—  
【リサーチ・ナビのコンテンツ】



から見えるもの

古野 朋子

## 1. 「本の万華鏡」とは

「本の万華鏡」<sup>1)</sup>は、国立国会図書館の様々な所蔵資料を、あるテーマで切りだしてホームページ上に展示するミニ電子展示である。平成21年5月、リサーチ・ナビの公開とともに提供を開始し、年に3本程度を公開する予定である。

万華鏡にはきれいなパーツが入っており、くるくる回すことでいろいろな景色が見えてくる。万華鏡をのぞくように、ホームページ上で気軽に所蔵資料を楽しんでいただくことを想定して、このタイトルを名づけた。

記念すべき第一回目のテーマは「アメリカ大統領の歴史—あらためて知る220年」。「オバマ大統領で騒いでいるけど、そういえばアメリカ大統領の任期って何年なんだろう」「オバマ大統領の自伝が人気だけど、ほかの大統領の自伝にはどんなものがあるんだろう」といった素朴な疑問から、「ワシントンの桜の木のエピソードってほんとに教科書に載っていたの?」「テレビでの宣伝合戦が有名な選挙っていつだったっけ?」といった、雑学的なことまで取り上げている。第二回では「洋靴—足元からの文明開化—」として、現代では身近な靴が、明治以降の日本人に戸惑いながら受け入れられていく様子を紹介した。

「アメリカ大統領」や「靴」というテーマで集めた様々な本を、万華鏡を回すように気軽に見るうちに、意外なこと、ちょっとした面白い話を見つけてもらおうという趣旨である。リサーチ・ナビの「調べ方案内」では、ビジネスや論文執筆に役立つ情報を掲載しているが、「本の万華鏡」は、もっとカジュアルな知的好奇心を満たすためのページと言えよう。

- ▼ リサーチ・ナビについて
- ▼ リサーチ・ナビの使い方
- ▼ 国立国会図書館に行く
- ▼ 図書館にきく

ミニ電子展示  
本の万華鏡

国立国会図書館  
National Diet Library

NDL-OPAC  
国立国会図書館 館蔵書・請求システム

レファレンス協同  
データベース

PORTA

② 思いついたキーワードを入れてください  🔍 検索

本の万華鏡



リサーチ・ナビ > 本の万華鏡

本の万華鏡トップページ

平成21年5月、ミニ電子展示「本の万華鏡」の提供を開始しました。

このコーナーでは、時事的なもの、身近で楽しいものなど、様々なテーマについて、国立国会図書館の蔵書を使ってご紹介していきます。解説とともに、一部の資料は、画像を掲載したり、全文の画像が見られるサイトへご案内します。

また、前身である常設展示(東京本館、平成20年終了)の155回に及ぶ常設展示のパフレットも順次移行予定です。

今後は、数か月ごとに新しいテーマを追加します。テーマごとに様々な模様が展開する「本の万華鏡」を覗いてみてください。

コンテンツ

本の万華鏡

①

第2回 洋靴—足元からの文明開化—

鎖国が終わわり、開国という時代の転機の本真だった中にあった日本には、西洋からの様々な文物が押し寄せて来ます。日本人は、それらを様々な形で取り入れていきました。その一つの例が「洋靴」です。珍しい西洋の品物として紹介されることから始まり、軍隊や官公庁などで取り入れられることで、喜んで、あるいは嫌々ながら、人々は靴を履き始めます。さらに、ファッションとしても受け入れていきました。

今回の展示では、「洋靴」をテーマに、日本人がどのようにそれと出会い、受け入れていったかに焦点をあてて資料をご紹介します。普段足元を意識する方もしない方も、その歴史について思いをはせてみるのはいかがでしょうか。どうぞお楽しみください。

第1回 アメリカ大統領の歴史—あらためて知る220年—

「本の万華鏡」第1回では、アメリカ大統領について、当館蔵書をもとに、3章に分けてわかりやすくその歴史を振り返ります。第1章では、4年に1度行われてきた大統領選挙に注目し、第2章では大統領自身の著作をご紹介します。そして第3章では、日本を訪れた大統領についての報道や、ワシントンやリンカン(リンカーン)が登場する明治期の資料を取り上げます。

本の万華鏡:検索

検索

③

本の万華鏡:カテゴリ

- 学術一般 (16)
- 政治・法律・行政 (8)
- 歴史・地理・哲学・宗教 (40)
- 社会・労働・教育 (23)
- 科学技術・医療 (14)
- 経済・産業 (11)
- 芸術・言語・文学 (49)

④

クイックリンク

- 本の万華鏡トップページ
- 過去の常設展示一覧
- 利用方法とご注意

⑤

⑥

最近の追加記事

- 第2回本の万華鏡「洋靴—足元からの文明開化—」第2章(1)
- 第2回本の万華鏡「洋靴—足元からの文明開化—」第2章(2)
- 第2回本の万華鏡「洋靴—足元からの文明開化—」第1章(1)
- 第2回本の万華鏡「洋靴—足元からの文明開化—」第2章(1)
- 第2回本の万華鏡「洋靴—足元からの文明開化—」第2章(2)
- 第15回常設展示 本の中の「あひまゆみ」
- 第19回常設展示 近代日本と「国語」
- 第19回常設展示 辞書を片手に世界へ—近代デジタルライブラリーにみる明治の語学辞書
- 第15回常設展示「国政・国語」近代以降の事件と名方士
- 第14回常設展示 路面電車クローニクル

- ① 最新コンテンツはここから
- ② 「リサーチ・ナビ」の1コーナーであるため、この検索窓から「リサーチ・ナビ」の他のコンテンツも同時に検索することが可能。キーワードも付与しているので、本文中に含まれていない言葉であっても、関係するテーマであればヒットする
- ③ 「本の万華鏡」内の検索
- ④ カテゴリでの検索
- ⑤ 過去のコンテンツ
- ⑥ 全般的な案内



第1回本の万華鏡「アメリカ大統領の歴史—あらためて知る220年—」

2009年5月11日

リサーチ・ナビ > 本の万華鏡 > 第1回 アメリカ大統領の歴史—あらためて知る220年—

キーワード: 大統領; アメリカ; 歴史; 選挙; 自伝 カテゴリ: 政治・法律・行政; 歴史・地理・哲学・宗教 件名 (NDLSH): 大統領--アメリカ合衆国 分類 (NDC): 312.53

今年(2009年)1月20日、バラク・H・オバマがアメリカ合衆国第44代大統領に就任し、アメリカ初の黒人大統領として世界中から注目を集めています。また今年には、ジョージ・ワシントンが初代大統領に就任した1789年4月30日から数えて、220年にあたります。

「本の万華鏡」第1回では、アメリカ大統領について、当館蔵書をもとに、3章に分けてわかりやすくその歴史を振り返ります。第1章では、4年に1度行われてきた大統領選挙に注目し、第2章では大統領自身の著作をご紹介します。そして第3章では、日本を訪れた大統領についての報道や、ワシントンやリンカン(リンカーン)が登場する明治期の資料を取り上げます。

様々な角度から浮かび上がるアメリカ大統領の姿をお楽しみください。

ご意見・ご感想は次のアドレスまで(返信はいたしません。)

webcontent@ndc.go.jp

章構成になっているので、目次から各章を閲覧

第1章では大統領の制度そのものについて、第2章では大統領の著作を紹介

目次

- 第1章 大統領はいかにして選ばれたか
- 第2章 日本に紹介されたアメリカ大統領の著作
- 第3章 日本人、アメリカ大統領に出会う
- 掲載大統領リスト
- 主な参考文献
- 利用方法とご注意

コンテンツ本体。展示資料ごとに解説し、画像も一部掲載

第3章では、日本人の目を通したアメリカ大統領像を紹介。リンカーンとワシントンは勤勉さと正直さを持つ偉人として描かれた。彼らを題材にした明治時代の修身の教科書や、唱歌「ワシントン」はとても興味深い。

11. 尋常小学修身書 見直し用 第3学年 (国定修身教科書: 複刻 第1期 / 文部省著 東京: 大空社, 1990明治36年(1903)刊の複製【FC49-E25】)

第12課「しよーじき」

第12課に、有名な板の木の逸話が紹介されています。しかし、この逸話は伝記作者による創作と考えられています。メーソン・ロック・ウィームズが著したワシントンの伝記の初版(1800刊)にはなかったこのエピソードは、第5版(1806刊)になって初めて登場しました。



12. 唱歌教科書 教師用 巻4 / 共益商社楽器店編 東京: 共益商社楽器店, 明治35(1902)【YDM72675】[近デジ]

唱歌「ワシントン」(作詞者不詳。北村季晴作曲)は、「ロッキーおろし、吹き荒れて、ハドソン湾に、浪さわぎ」といった壮大な歌詞で独立戦争におけるワシントンの軍功を称えています。ちなみに、この曲に、慶應義塾大学の野球選手であった板井弥一郎が作詞した替え歌が、慶應義塾大学の応援歌として使われました。

唱歌「ワシントン」楽譜



## 2. 「常設展示」のおすすめコンテンツ

### ◆ 「本の万華鏡」の前身「常設展示」

画面右のメニューには「過去の常設展示一覧」というリンクがあるが（75ページ⑤参照）、じつは、「本の万華鏡」は、昨年まで存在していた「常設展示」の後継である。「常設展示」とは、平成2年<sup>2)</sup>から20年まで、東京本館回廊に展示のための小スペースを設け、身近で面白いテーマを取り上げて、数週間から2か月を展示期間として当館所蔵資料を展示していたコーナーで、その「常設展示」を、インターネット上での情報発信に軸足を移してリニューアルしたものが、「本の万華鏡」である（経緯の詳細については「3. 「常設展示」から「本の万華鏡」へ」で後述）。ここでは、「本の万華鏡」がそのコンセプトを受け継いだ、「常設展示」のバラエティに富んだコンテンツをご紹介します。

過去の「常設展示」について、ホームページ上でのアクセス数を調べてみた（表参照）。

栄えある1位に輝いたのは、「100年前の100年後—明治～昭和初期の未来

過去の「常設展示」 アクセスランキング

	回次	タイトル	アクセス数
1位	111	100年前の100年後—明治～昭和初期の未来予測—	2,797
2位	145	外食の歴史	2,679
3位	148	女学生らいふ	2,483
4位	140	明治の息吹—漫画・諷刺画から—	1,749
5位	119	日本の集合住宅—アパート、マンションに見る20世紀—	1,442
6位	127	徒然草を英訳すると…—翻訳された日本文学—	1,250
7位	143	日本の「美しき時代」—大正時代に生まれたもの—	1,242
8位	155	すし—ふるさとの味—	1,175
9位	114	洋裁の歴史	1,026
10位	151	本の中の「おりがみ」	1,017

\* 「常設展示」終了後、「本の万華鏡」開始まで（平成20年11月～21年4月）の、当館ホームページ常設展示コーナー（「本の万華鏡」へ移行後は閉鎖予定）へのアクセス数（PDF版、画像含む）

予測一」(第111回)。世紀の変わり目である平成12(2000)年11月から平成13(2001)年1月まで開催された。科学技術、文学、歴史と様々なジャンルを横断して、社会主義小説から藤子不二雄の漫画まで、昔の人が未来をどう予測していたかを紹介する展示である。

#### ◆検索ではなく芋づる式で

「100年前の100年後—明治～昭和初期の未来予測—」(第111回 平成12年11月～平成13年1月)のように、特定のジャンルにおさまりきらないテーマは「常設展示」の得意分野であり、その後継の「本の万華鏡」でも積極的に取り上げたいところである。NDL-OPACを検索して文献リストを作ろうとしても、過去の人が未来をどう予想していたか、という切り口では、タイトルでの検索も分類記号での検索も難しいからだ。件名検索では「未来論」という件名があるが、受入整理された年代や資料群によっては件名が付与されていない資料もある。そういった、簡単には検索できないテーマについて、職員が様々な目録および参考文献をもとに所蔵資料を調査し、そこからさらに関連する資料を見つけ出し、という作業を繰り返して作っていくのが「常設展示」と「本の万華鏡」の特色である。

#### ◆特定のジャンルを超えたテーマ

特定のジャンルを超えたテーマはこのほかにも、江戸時代から現代までの、雪の結晶に対する科学的な研究から文様としての使われ方まで、様々な資料を紹介する「雪—冬に咲く華—」(第134回 平成16年11月～17年1月)や、プラトン、トマス・モアからオノ・ヨーコまで、ユートピアの捉え方を多面的に紹介する「ユートピア—どこにもない場所—」(第133回 平成16年10月～11月)などがある。

#### ◆日常的なテーマ、趣味的なテーマ

ベスト10には、外食、集合住宅、すし、洋裁と身近で日常的なものが4つもランクインしている。身近なものであるにもかかわらず、その歴史や意味をあまり把握していないことは、意外に多い。ファーストフードやファミリーレストランのない時代の外食とは? 押し寿司は握りや散らしよりも伝統的? 公団住宅は流行最先端だった? 洋裁は昔盛んだったが今はほとんどが既製服だ…。

国立国会図書館の蔵書の最大の特徴は、明治以降の国内出版物の所蔵量が

国内最大を誇ることである。そのため、身近なものの通史を追うことができる。硬い論文を読むほどのことではないが少しだけ知りたい。そんな日常的なものをテーマにした回は、ほかにも、古今東西のお肌のお手入れ法を集めた「美の探求～肌のお手入れ法あれこれ～」(第103回 平成11年9月～10月)などがある。

10位には、おりがみがランクイン。趣味的なものには、ほかにも「虫を記録する―昆虫図鑑古今東西―」(第154回 平成20年6月～8月)などがある。熨斗袋といった伝統的なものとおりがみがつながっていたり、戦前の昆虫採取の方法が現代と変わらなったり、と楽しい趣味の知られざる一面を知ることができる。

#### ◆近代の美しい本

3位、4位、7位となった女学生、明治時代の漫画・風刺画、大正時代というテーマは、当館所蔵の明治以降の美しい出版物を紹介した例である。明治、大正の本の中には、図版が美しく、今みると新鮮なものが多数ある。少し前の懐かしい時代を、本を通じてご覧いただくことができる。

#### ◆海外刊行の日本図書

国立国会図書館では、日本に関する海外刊行の図書を優先的に収集している。そのため、海外で翻訳された日本文学というテーマでの展示を何回か行っている。6位になった「徒然草を英訳すると……―翻訳された日本文学」(第127回 平成15年8月～9月)のほかにも「ハムレットを日本語で」(第73回 平成8年8月～9月)などがある。また、「日本、チョーかわいい!!―アジアにおける日本大衆文化の浸透―」(第118回 平成14年2月～3月)は、最近とみに人気の日本のアニメや漫画が、どのように翻訳・紹介されているかを、東・東南アジア各国の資料を通じて知ることができる。

#### ◆時事的なもの

ベストセラーになった『ノストラダムスの大予言』で世界が滅亡するとされていた1999年7月に開催した「終末をむかえて―出版に見るノストラダムスブーム―」(第101回 平成11年7月～8月)や、朝青龍が話題になった2008年に開催した「「国技・相撲」―近代以降の事件と名力士―」(第153回平成20年4月～6月)は、小回りのきく常設展示ならではのテーマである。

### ◆特色ある資料群

小さくて珍しい豆本を集めた「豆本—ちひさきものの世界—」（第136回 平成17年3月～5月）、永久保存という当館の役割ゆえに、古い雑誌を廃棄しないからこそできた「雑誌のあゆみ50年」（第115回 平成13年7月～9月）、収集されにくいマニュアル類を集めた「身をたて名をあげ…—明治時代の受験—」（第98回 平成11年3月～4月）や「彼女は斯うして就職した。—女性のための就職案内書—」（第70回 平成8年5月～6月）も、国立国会図書館の蔵書ならではの展示と言える。

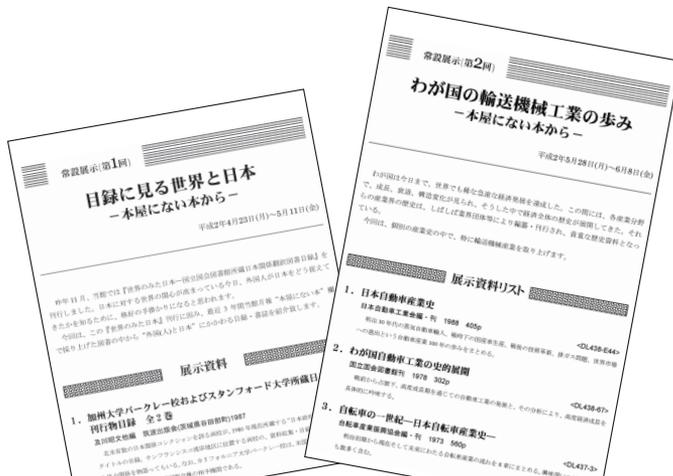
### ◆レファレンスのツールとしても

レファレンスで「流行歌が一覧できる本」を聞かれ、「流行歌に見る世相と大衆のころ—昭和のはじめから東京オリンピックまで—」（第79回 平成9年3月～4月）を活用したこともあった。「常設展示」がレファレンスのツールとしても役に立っていることの一例である。

## 3. 「常設展示」から「本の万華鏡」へ

### ◆初期の「常設展示」

「常設展示」が始まった平成2年当初は、展示ケース1台に5冊の所蔵資料を並べただけのごく簡素なものであった。



第1回・第2回の「常設展示」パンフレット

当時はホームページというものはまだこの世に存在せず、当然、インターネットでの蔵書検索もできなかった。職員が使用する検索システムですら、年代別に分かれており、一本化されていなかったのである。そんな中、ほんの数冊でも、あるテーマで選ばれた所蔵資料が展示ケースに並んでいることは、それだけで意味があったと言えよう。展示ケースは東京本館ゲートを入ったところにあり、利用者の出迎えの意味も兼ねていた。

第50回記念には「本のなかの小さな宇宙—蔵書票と蔵書印—」（平成6年8月～10月）として大規模な展示を行い、展示ケースも6台使用、パンフレットは44ページにも及んだ。この前後から、次第に展示内容をカテゴリー分けし、それぞれに解説をつけるようになり、ストーリー仕立ての展示に変化していく。出展資料も増え、参考文献や年表も掲載するようになった。

#### ◆インターネットと「常設展示」

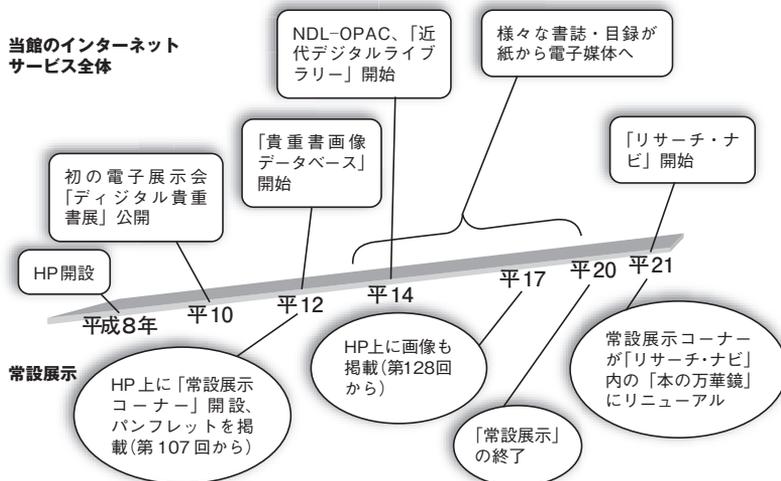
この傾向をさらにおしすすめたのが、インターネットの発達である。当館ホームページが開設されたのは平成8年だが、平成10年に、当館開館50周年を記念した貴重書展の電子版「デジタル貴重書展」（<http://www.ndl.go.jp/exhibit/50/index.html>）が、当館初の電子展示として公開されるなど、ホームページのコンテンツも次第に増えていく。

そのような中、「常設展示」のパンフレットのHTML版を作成して当館ホームページにも掲載しようという話が出始めた。作成したパンフレットを永続的に掲載でき、展示そのものの広報にもなるからだ。平成12年2月の「流行語あれこれ—時代を映す言葉たち—」（第107回 平成12年2月～4月）からホームページ上に常設展示コーナーが生まれ、パンフレットのホームページ掲載が始まった（第106回以前のパンフレットは平成19年7月に一括してPDF版を掲載）。企画から解題執筆まで、展示の準備にはこれまで以上に力が入り、展示の規模も大きくなっていった。ちなみに、翌月の平成12年3月には「貴重書画像データベース」（[http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre\\_com\\_menu.jsp](http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_com_menu.jsp)）がスタートしている。

平成14年10月、従来のWeb-OPACと比べ書誌データの収録範囲を大幅に拡大したNDL-OPACが当館ホームページ上でスタートし、これまで部分的にしか検索できなかった当館の蔵書のほとんどが、いつでも、どこでも、誰でも検索できるようになった。これにより一層、展示リストに単なる一覧ではなくストーリー性が求められるようになったと言えるだろう。

同じころ、「近代デジタルライブラリー」（<http://kindai.ndl.go.jp/index>）

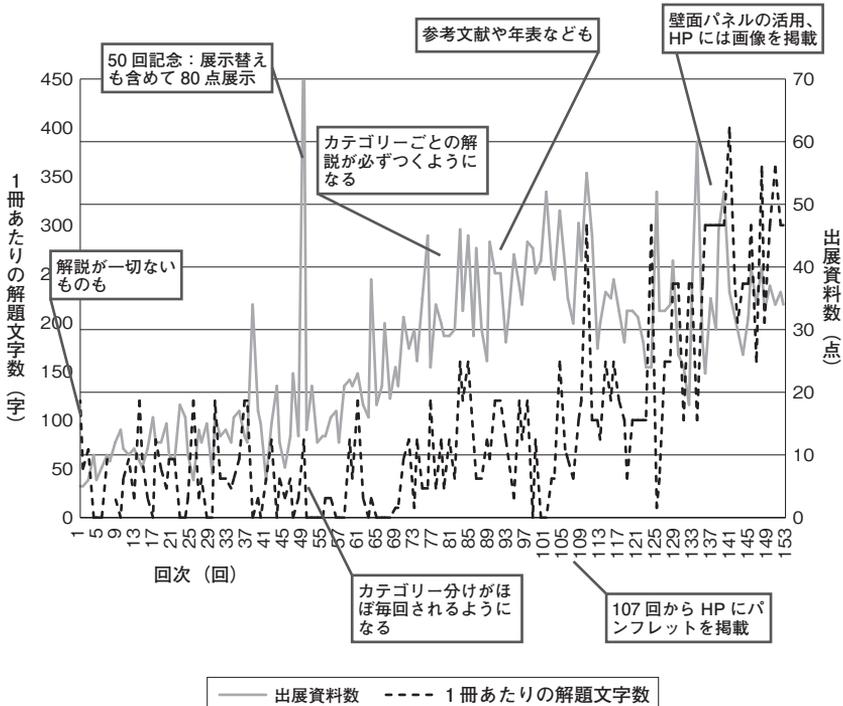
html) もスタートしている。当館の蔵書を、全ページ、インターネット上で読むことができる画期的なサービスである（著作権満了または著作権処理済みのものに限る。明治期のものから順次公開中）。「電子展示会」（「デジタル貴重書展」を皮切りとした、おもに貴重な古典籍資料や憲政資料の画像をデジタル化して紹介するインターネット上の大規模な展示会を指す）も年に2本程度公開され、コンテンツを着実に増やしていった。このように、インターネット上で本が読める時代へと向かっていく中、ホームページ上の常設展示コーナーはこれまで属していた「ニュース」のコーナーを離れ、平成14年秋、電子展示会を掲載する「ギャラリー」のコーナーに移動する。現物そのものの展示開催の広報という位置づけから、電子展示の一環という位置づけにシフトしていった現れである。「常設展示」のコンテンツも、平成15年10月の「印の継承譜—国立国会図書館の印と印影—」（第128回 平成15年10月～12月）から、ホームページ上のパンフレットに、一部ではあるが資料のデジタル画像の掲載を開始し、第129回「暮らしを変えた新製品～身近なモノがデビューした頃～」（平成16年1月～2月）からは、近代デジタルライブラリーといった当館の他コンテンツへのリンクも積極的に行っている。こうして、ホームページ上では「電子展示会」に近づく形になっていった。



当館のインターネットサービスと「常設展示」

### ◆資料そのものの展示も発展したが

一方、資料そのものを展示する現物展示の形式にも変化があった。平成16年10月、本館改修工事にあわせて壁面パネルを併設したことにより、展示ケースに入りきれないものや展示しにくい新聞記事などを複製パネルにして展示することが可能になった。そのため、展示する資料の数は、多いときにはパネルも含めると60点近くにも及んだ。



数字で見る常設展示（出展資料数、解説文字数の推移）

しかし、現物展示には物理的制約がある。展示ケースは固定された3台のみで、増やそうにもスペースの都合がある。しかも、資料保存のため紫外線の当たる明るいところには置けない。本館改修時に、資料保存を考えて第一閲覧室前の階段下に展示場所を移したが、利用者の目にはとまりにくくなってしまった。また、長期間の展示は資料の劣化を早めるので、最長でも2か月しか展示できない。

現物展示を見る人数と、ホームページ上のパンフレットを読む人数は、どちらが多いのだろうか。そんな迷いが生じている中、「リサーチ・ナビ」の開発が始まった。人気コンテンツ「調べ案内」を様々なデータベースと同時に検索できるシステムに「常設展示」も参加することで、文献リストとしての価値が高まることが期待された。そこで、「常設」という名を捨て、現物展示は広報のための数点に限定し<sup>3)</sup>、電子版「本の万華鏡」をメインとして再スタートすることになったのである。

#### 4. 図書館での展示のあるべき姿とは

しかし、資料そのものの持つ紙の風合い、活字の形、そのとき確かに出版されたという時代の空気、それらは資料そのものの展示に勝るものはない。一方で、展示には「当館にはこのような資料がある」と紹介した文献リストとしての意味合いもある。

「常設展示」開始当初は意識していなかったこの2つの特徴が、インターネットの発達とともに顕著になり、時に矛盾し、乖離しそうになったと言えるだろう。果たしてどちらを重視すべきなのか。

公共図書館では最近刊行された本を手にとって楽しめるような展示が多く開催されているが、当館では資料管理上、展示資料を手にとることはできない。

それらを解決するために、今後は、「電子展示会」と現物展示をリンクさせ、たとえば、展示した資料に手は触れられないが、資料の中身を展示ケースに併設されているディスプレイで読める、といった仕組みが期待される。また、明るく目立つ場所に展示しつつも、ケース内の照度を低くし紫外線を防止するような技術の開発も待たれる。

その日が来ることを期待しながら、私たちは今後も、国立国会図書館らしい蔵書構成を生かして、楽しい万華鏡を何本も作っていくつもりである。

本を並べることで、何かが見えてくる。このような本が出版されていた、ということがわかるだけで意味がある。ストーリー仕立てとは言っても、私たちは、どの説が正しいとは断言しない。「子犬は汽車に乗って—ハチという名の犬—」（第90回 平成10年5月～6月）には、銅像となったハチ公をたたく新聞記事や、感動的な小説、それに、ハチ公の真実を探る本、様々な本が紹介されている。ハチ公が本当のところどう思っていたかはわからない。ただ、ハチ公をめぐるたくさん本が出版されていること、それを資料

そのものなり文献リストとしてなり、なんらかの形で展示することで、何かを感じとっていただけると信じている。

#### 注

- 1) URL : <http://rnavi.ndl.go.jp/kaleido/> 国立国会図書館HP>調べ案内>リサーチ・ナビ>本の万華鏡
- 2) 「常設展示」には第一期と呼ばれる前身があり、昭和58年1月から昭和60年3月まで31回開催している。新館開館に伴う整備と組織再編のために休止し、5年後の平成2年4月から第二期を開始。本稿ではこの第二期を取り上げている。
- 3) 電子版公開の1か月ほど後から2か月間、東京本館2階第一閲覧室前（かつての常設展示コーナー）に数点を展示している。

#### 参考文献

- ・開館60周年を記念して「1998-2008」この10年のトピックスと今後（第7回）進化する展示会と主題情報提供. 『国立国会図書館月報』573号, 2008.12, pp.22-27.
- ・常設展示の“これまで”と“これから”―常設展示150回を記念して. 『国立国会図書館月報』560号, 2007.11, pp.17-19.
- ・知識をカタチに一国立国会図書館が目指す「主題情報提供サービス」（第5回）電子展示会. 『国立国会図書館月報』557号, 2007.8, pp.32-33.
- ・電子展示会のこれまで（国立国会図書館関西館の電子図書館サービスの展開）. 『国立国会図書館月報』542号, 2006.5, pp.7-11.
- ・国立国会図書館展示委員会. 特集 国立国会図書館展示会の記録―常設展示を中心に. 『参考書誌研究』46号, 1996.11, pp.1-131.
- ・鈴木 智之. 50回目を迎えた常設展示. 『国立国会図書館月報』403号, 1994.10, pp.12-15.
- ・稲村 徹元. 国立国会図書館展示会目録集覧 付上野図書館展示会目録年表（稿）. 『参考書誌研究』30号, 1985.9, pp.23-35.
- ・小笠原 正治. 展示会の覚書―展示会之心得五箇条. 『国立国会図書館月報』275号, 1984.2, pp.16-19.

（ふるの ともこ 主題情報部参考企画課）